

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4070501954		
法人名	有限会社 マエダ		
事業所名	グループホームはなまる（1階、2階）		
所在地	福岡県北九州市小倉南区中曽根1丁目4-10		
自己評価作成日	平成25年2月25日	評価結果確定日	平成25年4月4日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaijokensaku.jp/40/index.php?action=kouhyou_detail_2012_022_kani=true&jigyosyoCd=4070501954-00&PrefCd=40&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	有限会社 医療福祉評価センター
所在地	福岡市博多区博多駅東2-6-1九勸筑紫通ビル9階
訪問調査日	平成25年3月11日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

「地域で仲良く、自信と笑顔」の理念のもと、まずは職員が自信を持ち、笑顔で明るく介護をし、それが入居者の方々に伝染していくようなグループホームを目指してきました。その成果が徐々に表れてきていると自負しております。ケアカンファでは、スタッフでチームを組み、入居者さん一人一人に担当者を決めて、きめの細かい介護計画の作成を行っています。

また、夏祭り、盆踊り、市民センターの文化祭等町内の行事に参加したり、地元中学生や幼稚園との交流、防災訓練に地元消防団に参加していただくなど、地域の方々とのふれあいを積極的に行っています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

・当事業所はJR曾根駅が近辺に位置した利便性の高い場所にあり、「地域で仲良く、自信と笑顔」とする理念に基づき、家族や近隣の幼稚園・中学校、ボランティア等との交流を積極的に行っている。この理念を実践している結果、利用者や職員から笑顔が満ちていた。

・リビングでは職員手作りのパズル等で利用者が楽しんでおり、日常生活の中にリハビリを取り入れていた。また事業所に隣接しているマンションとの境には、職員が育てた花のプランターが置かれ、窓全体をブラインドやカーテンでさえぎるのではなく、窓の半分程度をカーテンでさえぎり、プライバシーの保護を図りながら外部との繋がりを保つ工夫もみられる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印	
58	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	65	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
59	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
60	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
61	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
64	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、(Altキー)＋(Enterキー)です。〕

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I.理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「地域で仲良く、自信と笑顔」を理念として、地域に溶け込んだ運営に努めている。	理念は、「地域の一員として仲良く、自信に満ちた施設運営を」ということで、設立時に作成している。「利用者に笑顔で」をモットーに、常に地域の方や出入りの業者の方にも笑顔で挨拶を心がけている。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町内会に入会し、町内の文化祭、清掃、お祭り等に参加し、地域の住民との交流に務めている。また地域の中学校や幼稚園と交流を図っている。	市民センターの文化祭など地域行事に参加しており、定期的に中学校の合唱クラブや幼稚園児の訪問を受け入れている。また、そのつながりを生かして地域の人たちに認知症についての講演を行う等、外に向けて発信も行っている。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	中学生、園児をホームに招いたり、中学生の職場体験やヘルパー資格の実習および市民センターのボランティアを積極的に受け入れ、認知症介護に対する理解を深めてもらっている。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議ではホームの現況、方針等を説明しているが、メンバー（包括センター、家族）からも意見やアドバイスを聞き、日常の介護に活かしている。	運営推進会議を、2か月に1回開催し、利用者家族・地域包括支援センター職員・民生委員が参加している。会議の内容は主に運営状況報告・制度等の説明、情報交換や相談等である。また他のグループホームで運営推進会議に警察官が参加している情報を得ており、今後可能であれば参加を依頼したいとのことである。		
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議に包括センタースタッフに参加していただいて、意見交換を行っている。また、管理者がグループホーム協議会の副会長をしている関係上、市の担当者と意見交換をする機会が多い。	管理者が福岡県Dブロック地区のグループホーム協議会の役員の関係から、市の介護保険課の職員と常日頃からコミュニケーションを取っており、より良い関係を築いている。包括支援センターの職員からは「はなまるの運営推進会議は、アットホームで楽しい」と言ってもらえている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	ホームが交通量の多い道路に面しているため、安全上の観点からやむを得ず玄関・勝手口に施錠しているが、それ以外は内外の研修を通して身体拘束の禁止を職員に徹底している。	事業所としては施錠することを望んでいないが、事業所前は常に車の通行があり、利用者の生命の安全を守る為に玄関・勝手口の施錠を行っている。事業所内では行動を束縛していない。職員は、研修や実践を通じて、年長者に対する尊厳を持った対応を心がけ、身体拘束をしないケアを行っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内の虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	研修や勉強会を通して、職員全員で虐待の無い介護に取り組んでいる。		
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	所内の勉強会で職員が学ぶ機会を持つとともに、権利擁護のポスター、介護サービス相談員の氏名、苦情受付の第三者委員の連絡先を玄関に掲示している。	事業所内や外部の研修を通じ、職員は権利擁護制度の意義や内容について学び、理解に努めている。また事業所内では、目につきやすいように権利擁護のポスター等を掲示している。	
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時や契約内容の改定時には、その内容につき利用者、家族に口頭、文書で十分に説明し、承諾を頂いている。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	玄関に苦情解決サービスのポスターを掲示し、苦情受付担当者、苦情受付責任者および第三者委員の氏名を公表している。また適宜利用者家族へ介護サービス等に対するアンケートを実施し、運営に反映させている。	毎年利用者・家族に対してアンケートを実施しており、9月には家族会である「はなまる会」を定期的の実施し、意見・要望を運営に反映させている。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	全体ミーティングや、リーダー会議等を通じ、管理者、ケアマネージャーおよびスタッフ間の意見交換を行い、運営に反映させている。	職員の意見や提案が反映されやすいように、空いている時間を利用し、サブリーダーが職員とのミーティングを行い、それによりリーダー会議や全体ミーティングを通じ、運営に反映させる仕組みがある。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員間に労働条件の不公平感が出ないようシフト作りに留意している。また職員間の切磋琢磨を期待し、業務改善のアイデアを出した職員には「はなまる賞」という賞を与えている。		
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。また、事業所で働く職員についても、その能力を発揮し活き活きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保障されるよう配慮している。	職員採用に関して、性別や年齢などを採用基準には一切していない。また個々の能力に応じて、業務を分担している。	性別の区別・年齢の制限を設けず、20歳代から60歳代までの職員が勤務している。職員の中で絵が得意な人は、手作りの広報誌を作成したり、花を育てるのが得意な職員は、玄関やベランダで花を育てる等、個々の能力を生かした業務を分担させ、職員が生き生きと働くことができている。	
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる。	権利擁護、身体拘束や虐待の無い介護、法令遵守などの勉強会の折に入居者さんの人権に関する教育を実施している。	権利擁護等、研修会で学ぶとともに、個人の尊厳を大切にすることを常に念頭に置くよう職員に周知している。また、その日のリーダーを当番制で決め、そのリーダーが利用者に対する言葉遣いや態度を提言し、職員に注意を促している。	
15		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	社外の研修案内を職員間で回覧し、希望者は積極的に参加を促す一方、管理者、ケアマネからも職員を指名し、一定の研修を受けるように指示している。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム協議会はもちろん、独自にいくつかのグループホームと交流を持ち、勉強会や情報交換会を行っている。またヘルパー2級の実習を積極的に受け入れている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	フェースシートや聞き取りで本人の要望や安心を確保するように努めている。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の要望は、入居時はもちろん、随時聞き入れながら介護計画に導入している。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	日々の申し送りや、担当者会議等で、現状の問題点、必要な支援を見極め、迅速に対応している。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の尊厳をまもりつつ、家族として共感し合いながら日々の生活を営むように務めている。		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご家族の方々は、それぞれいろんな状況を抱えておられるので、一律的な対応にならないよう、家族支援を行っている。		
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	スタッフの人数も限られてるところ、なかなか「馴染みの場所」への訪問は困難。また友人、知己も高齢になっているところ、訪問される方も、家族、親戚の場合が多いのが実情である。	毎月長崎から訪問する家族がいるが、馴染みの場所への外出支援や知人等との関係維持については、知人の高齢化や職員の人員との関係上難しいものがある。家族会や、請求書を送付する際に同封する手紙等を通じ、外出支援や、誕生会を利用した知人の訪問をお願いしている。	難しい現状ではあるが今後、市のボランティア等を活用し、利用者が馴染みの場所の訪問や人との関係を維持できる仕組みを築くことが望まれる。
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	個々の性格、個性、趣味等を把握し、利用者同士がよい人間関係を築けるよう日々支援をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所された後は、お見舞いに行く程度で特別なフォローはとっていない。ただ、一部の家族は、退所された後もそのまま「はなまる会」の行事に参加したり、年賀状の交換をしている。また利用申込者を紹介してくれている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	その人の希望や意向をできるだけ聞きいれ、(可能な限り)その人らしい生活ができるようにしている。	飲酒を希望する利用者がある場合、食堂等職員が見守りながら飲酒できるよう配慮している。基本的には本人の希望に寄り添い、また無理強いをしない程度で、その人らしさを継続できるようにしている。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人、ご家族、訪問者等からこれまでの生活歴を聞き取るよう務め、またこれまでの利用してきたサービスについても把握するように努めている。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々変化していく心身状態の把握は、生活日誌や業務日誌等に記載している。また、各人にあったリハビリメニューを考え、実施している。		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	主にケアマネが本人、家族の意向を聞きだし、その意向を尊重しつつ、各利用者毎に決めた担当スタッフ、リーダー、ケアマネといったチームでケアカンファを行い、介護計画を作成している。	職員一人一人に、利用者の担当を割り当て、担当になった職員が、利用者の状況を把握しておく。そしてまずはチームで担当者会議を行い、その内容を月1回のリーダー会議で話し合い、介護計画に反映している。	
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々変化していく心身状態の把握は生活日誌や業務日誌等に記載し、その経過を介護計画に反映させている。		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	個々のレベルに合わせたリハビリやトレーニングを行い、また外出(散歩)、買い物といった、個々の希望にできるだけ対応するように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の市民センター、小・中学校、幼稚園と交流を図っている。また、防災訓練には地域住民にも参加していただいている。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	体調の変化があったときは24時間体制で提携医に連絡を取れる体制を敷いている。	何かあれば内科の提携医へ連絡がとれるようにしている。内科以外の外科や皮膚科、心療内科等へは事業所近くの病院や、利用者のかかりつけの病院を受診している。	
33		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	スタッフに看護師がおり、適宜適切な受診と看護が受けられる体制を敷いている。加えて、週1回臨時の看護職員が利用者の健康チェックを行っている。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院した場合は、病院との連絡を密にし、早期退院に務めている。		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化、看取り時のマニュアルを作成し、ホームでできること、緊急時の体制につき家族の方々に事前に説明している。また、看取りに関し、提携医の協力を取り付けている。	家族、職員、提携医と連携をしながら、以前看取りケアを行ったことがある。今後も希望があれば、取り組んでいくとのことである。看取りケアを行ったことで、他の事業所から実践状況を聞きたいとの意向もあり、管理者が看取りケアについて講演を行っている。	
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	消防署の指導の下、定期的にAEDを使った心肺蘇生の訓練を実施している。		
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災訓練は地元消防団、消防署の指導の下行ってるが、地震、水害に対しての訓練は今後の課題である。	年2回火災訓練を実施し、その際AEDの使い方や、毛布等で人を搬送する方法等を学んでいる。火災訓練には、消防署と消防団が毎回立ち会っている。	火災訓練以外は、今のところ実施していないとのことであるが、いざという時に慌てず確実な避難誘導ができるよう、地震や水害等の訓練を実施することが望まれる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅳ. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
38	(17)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	その人の人格を尊重し、自信を持ってもらい、笑顔溢れる生活を送ってもらうよう務めている。またスタッフへの指導として、出勤、退社時の挨拶を徹底している。	職員が入職した際には、秘密保持に関する誓約書を交わし、在職中や退職後も知り得た情報を漏らさないよう徹底している。また、常に「利用者家族の前でその話し方をしてもいいか」ということを頭に置き、利用者との言葉遣いに注意している。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	できるかぎり自己決定の原則で支援している。例えば、飲み物にしても、画一的にならず、本人の希望を聞いて提供している。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	「利用者本位」の支援を目指してが、時として「業務優先」になりがちな時があり、スタッフ間で注意しあっている。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	自立度の高い利用者さんはもちろん、車椅子で過ごされる利用者の服装にも気を配っている。また、訪問美容師による整髪を定期的に行っている。		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	野菜の皮むきや盛り付けなどを手伝ってもらったり、後片付けを職員と一緒にしたり、食事関連が最も入居者さんと職員が触れ合っている。	食事の盛り付けや配膳等、可能な利用者は、毎日当番を決め手伝っている。利用者が集うリビングの隣に台所があり、調理の音や匂い等を感じることができる。	
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量や水分摂取量を毎日記録して、必要量の確認をしている。また、食事形態を利用者の嚥下状態を鑑みて対応している。		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食前のうがい、口腔体操と、毎食後の口腔ケアを実施している。夕食後は義歯をポリデントにより洗浄している。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄の記録によって、個別にトイレ誘導を行い、排泄の失敗やおむつの使用量の減数に務めている。また、可能な限り、昼間は布パンツの着用を促している。	利用者の3分の1程度が、昼間は布パンツ、夜は紙パンツを着用しており、日中はなるべくトイレへ誘導するようにしている。また排泄チェック表には、排尿、排便、水分補給も記録し、一人一人を管理している。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	トイレにセンサーを設置し、スタッフが排便の有無を確認するようにしている。また個々の体質に合わせた排便コントロールを行っている。		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	ほとんどの方が入浴を楽しみにしてるが、拒否の強い利用者には無理強いはいしないようにしている。また、男性による入浴介護を拒む入居者もあり、その場合は担当者を変更するなど、柔軟に対応している。	1階と2階でそれぞれ曜日を決め、午後からはレクリエーションをする為、なるべく午前中に入浴している。仲がよい利用者は、一緒に入浴する等、一人一人に応じた支援を行っている。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	各人に合った休息や睡眠をとってもらっているが、部屋にこもりっきりで、昼夜逆転にならないよう声かけをし、なるべく日中はリビングですごしてもらっている。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服用に関しては2重チェックを行い、服用ミス(量、種類)の防止に努めている。ただ、薬の数も多く、全ての薬効、副作用を把握はできていないのが現状。		
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	それぞれの能力に合わせた家政(掃除、料理手伝い)をしていただき、またパズル、塗り絵、手芸等、それぞれの趣味、レベルに合わせたレクリエーションにより気分転換を図っている。		
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	スタッフの人数の許す限り、温暖な日は交替で散歩に出かけている(玄関前が交通量の多い道路なので、単独での外出は禁じている)。また、年に数回、大型バスを借りて、花見、紅葉狩り、買い物ツアー等に出かけている。またその際は地元ボランティアに協力してもらっている。	真夏や真冬を除いて、なるべく外出しているが、職員の数等の兼ね合いもあり、家族が訪問した際に、外出と一緒にしてもらえよう依頼している。	職員の数も限られており、十分な外出支援ができていないようである。ボランティア等、様々な資源を活用し、利用者が希望する際には、外出ができるよう支援することが望まれる。

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金の所持は、本人と家族の承諾を得て、基本的に所持しないようにしている。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族や知り合いに電話するのは原則自由だが、かける場合は相手先を確認している（広告やTVショッピングに電話して、トラブルを起こした事があるため）。		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	玄関には季節の花を飾り、リビングの壁には季節感がわかるような手作りの作品や行事の写真を掲示し、居心地のよい空間となるよう工夫している。	玄関や2階のベランダには、職員が育てている花が植えてあり、視覚や聴覚で居心地よく感じることができる。また、食事の際、利用者の会話が弾んでいる時には、テレビをつけないようにしている。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビング以外にも、廊下の奥にくつろげる空間をつくり、気のあった同士でおしゃべりができたり、窓の外の景色を眺める事ができるようにしている。また気分転換の一環として、定期的に席替えを行っている。		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご家族には、使い慣れた家具や、普段使用していた小物やアルバム、家族の写真等を持ち込んでもらうようお願いしている。	できるだけ自宅で使用していた家具などを持ち込んでもらえるようにしている。また、寝具類は衛生上の面から事業所で貸与し、業者で洗濯してもらっているが、「どうしても枕が変わって眠れない」という利用者は、個別に対応している。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	室内は余計な家具、配線がないようにし、動きやすい配置に考慮している。また、ADLの低下により、部屋替えを行う事もある（トイレ、リビングへの距離を考慮して）。		